

平安京生態智と癒し空間の比較研究

鎌田東二 (こころの未来研究センター教授)
Toji Kamata

はじめに——研究の経緯

2007年より3年間、京都府の助成を受けながら「京都における癒しの伝統とリソース」(研究代表者:河合俊雄教授)の研究プロジェクトを進めてきた。「京都における癒しの伝統とリソース(資源)」とは、具体的に言えば、神社仏閣などのハード面と、そこにおける祭祀・儀礼や修行・修法や参拝・参詣・巡礼・観光などのソフト面を含んでいる。

実際、今なお京都の神社仏閣や祭りは国内外でも有数の観光の対象となっており、昨今の「パワースポット」ブームの影響もあって、広範な関心と人気を保っている。この、多くの人々のこころを惹き付け、安定や癒しをもたらすことのできるメカニズムや仕掛けとは何なのだろうか? 場所の力? ファンタスティックな建築空間? 荘厳なる象徴形式? エキゾチックなパフォーマンス? トランスする沸騰やそれとは対極の静寂?

このいわゆる「癒し空間」の研究は、臨床心理学、宗教学、民俗学、認知科学、地球科学、生態学などさまざまな方法と視点によりアプローチし、その空間の特質やそこでの身心変容を解明することを通して「臨床の知」や「臨地の知」を深めつつ、伝統文化に保持されてきた心の練り方や底力を現代にブラッシュアップし生かすことを目的としている。

研究成果の一部は、すでに、河合俊雄・鎌田東二『京都「癒しの道」案内』(朝日新書、朝日新聞出版、

2008年)、鎌田東二『聖地感覚』(角川学芸出版、2008年)、鎌田東二編『平安京のコスモロジー』(創元社、2010年)、渡邊克巳「モノの表情・眼力の研究」(「こころの未来」第2号・第5号、2009年3月、2010年9月)などの出版物や論考、またシンポジウム「平安京のコスモロジー」(2008年11月)「物語の発生する場所とこころ——『遠野物語』と古典」(2009年11月)などにより社会発信している。

これらの研究活動を踏まえて、本年度より新たに「癒し空間の比較研究」を始めた。ここでの「癒し空間」とは、伝統的な神社仏閣のみならず、広く、「オタクの聖地・アキハバラ」や「冬ソナの聖地」や高校野球のスタジアムなども含む。今年度は、相模の国(現在の神奈川県)の一ノ宮の寒川神社からの寄付金などにより、すでに、「平安京生態智・寒川神社研究会」との合同研究会を3回、フィールドワークを3回実施している。

癒し空間の比較研究——事例研究としての御所と首里城の比較

そもそも「宗教学」という学問は、19世紀後半のヨーロッパにおいて「比較宗教学」として発展してきた。比較言語学、比較神話学、民俗学、文化人類学・社会人類学など、関連する学問諸領域と連動しつつ、宗教現象や宗教思想の比較研究が蓄積されてきた。そこにおいて、聖地や霊場などの「癒し空間」や参詣・参拝・

巡礼の研究も積み重ねられてきた。日本では、熊野や伊勢や四国遍路などの参詣・巡礼研究には相当の蓄積がある。

しかしながら、そうした「癒し空間」がどのような個性や共通性や特性を持っているかの比較研究はそれほど多くはない。近年、民俗学者の内藤正敏らによって、江戸と京都の宗教空間の比較などがなされるようになってきたが、まだまだ部分的な個別の比較研究の段階であるといえる。

そこで、本研究プロジェクトにおいては、自分たちの研究と生活の拠点である京都(平安京)を比較の基軸と定点に据えながら、そこと、例えば、平城京・奈良、江戸・東京、琉球・首里、伊勢、吉野・熊野、出雲、アイルランド、バリ島、パリ、ローマなどとの、地域内比較・地域間比較・国際比較を進めていきたいと考えている。どこまで、どの程度の範囲と精度で比較研究をするかについては、時間と労力と費用と方法論な



鎌田東二編『平安京のコスモロジー』(創元社、2010年)

ども関係するので、全体像を視野に入れながら、できるところから着手していているというのが現状だ。

特に本年度に関心を持って進めつつあるのが、大和の国・藤原京・平城京、琉球・首里城、江戸・江戸城と平安京・御所との比較研究や、相模の国の延喜式内社と山城の国の延喜式内社の比較研究である。藤原京や平城京と平安京との比較については、前掲『平安京のコスモロジー』の中の拙論で少し考察したが、琉球・首里城と平安京・御所のコスモロジーや宗教空間の比較をしてみればどうなるか。首里王府と平安京を、宮都（都城）、最高司祭、神聖地、神聖歌謡、始原の島、始祖の神々などの観点から比較すれば、どのような共通項と差異性が見えてくるか、少しく紹介してみたい。

首里城は内郭が15世紀初期、外郭が16世紀中期に造られ、西面している。それに対して、御所は南面している。つまり、玉座に向かう時に東面するか北面するかという違い。換言すると、北上位と東上位の違いである。

御所の建築思想は天皇が北極星を背にする不動の位置にあるという思想に基づいており、それは中国の天子南面思想の受容によるものであるが、古代日本ではその北上位思想に先行する思想と信仰として東上位の思想と信仰があったと考えられる。沖縄の首里城は築城年代こそ15世紀以降と新しいが、それを支える建築・方位思想と信仰は大変土着古代的である。

首里城が東上位であるということは、琉球王が北極星ではなく太陽を背にして座るということであり、ここには明らかに太陽信仰、それも東から差し上げる朝日に対する信仰がある。東の海上にはニライカナイと呼ばれる海上他界があると考えられたが、そのニライカナイから届く冬至の光が沖縄本島の東南に位

置する久高島を經由して、^{せうじょう}斎場御嶽、^{ひんけ}弁ヶ岳（弁ヶ大嶽・弁ヶ小嶽）、首里城へと至る。朝日に刺し貫かれた軸線上に御嶽と呼ばれる「癒し空間」すなわち聖地と城が点在する。

沖縄の風水地理は、①南方に位置する小禄と豊見城連峰が青龍、②西方に位置する慶良間島が朱雀、③北方に位置する読谷村・北谷山が白虎、④東方に位置する弁ヶ岳が玄武とされる。だが通常、青龍が東方、朱雀が南方、白虎が西方、玄武が北方を護る霊獣である。つまり、琉球と中国や日本の風水地理は90度ずれている。琉球風水は東上位を基軸に成り立っており、これは藤原京が建都されるまでの古代日本の方位信仰と同じだったと思われる。要するに、北上位の前に古く東上位のコスモロジーがあったということだ。

それゆえ、「神の島」と呼ばれる東方の久高島を望む沖縄本島東南部の知念村や玉城村の聖域である御嶽や城を巡拝する神拝行事を「東御廻い」と呼ぶのも、「東」が上、すなわち「アガリ」だからである。この「アガリウマーイ」は14カ所の御嶽や城などの「癒し空間」をめぐる巡拝行である。この東上位思想が今も沖縄の人びとの世界観の中に息づいている。

次に、琉球神話と日本神話の始祖神を比較してみよう。袋中著『琉球神道記』（1605年）では、『古事記』（712年）や『日本書紀』（720年）におけるイザナギノミコト（男神・夫）とイザナミノミコト（女神・妻）に対応する始祖神は、アマミキヨとシネリキヨである。日本神話ではイザナギ・イザナミが男と女でその順番に登場するが、琉球神話では女神のアマミキヨ、男神のシネリキヨの順番に登場し、天から降りてきて島に木や草を植えて国土を作ったとされ



首里城公園 第2次世界大戦で破壊された首里城は、1992年に正殿などが復元された。（提供：首里城公園管理センター）

る。つまり女性優位。そして、この二神は風によって妊娠し、長男が王や按司などの支配者、次に長女が間得大君やノロやツカサなどの女性司祭、三番目の子が一般庶民となっていたという。

このように、首里城や御所の構造とそれを支えるコスモロジーや神話的思考や祭祀体系を比較すると、それぞれが持つ特質が浮き彫りになってくる。それを概括すると次のような表にできるだろう。

表 琉球王府と平安京の比較

地域	琉球王府	平安京
祭政の中心	首里城	御所
最高司祭	間得大君	斎王
聖域	御嶽・城	神社・寺院
歌謡	おもろそうし	古事記・万葉集
始原島	久高島	淡路島
始祖神	アマミキヨ・シネリキヨ	イザナギ・イザナミ

おわりに—— 「癒し空間」の衰退と未来

このようなコスモジカルな思考は、明治維新以降の近代国家システムの中では捨象ないし変形されてきた。そして今、沖縄は基地問題で大揺れに揺れ、京都では葵祭の葵は自生せず、また深刻なナラ枯れが進行している。両者の「癒し空間」は極度に疲弊し、衰退しつつあるのだ。矛盾するようであるが、そんな全体状況の中での「パワースポット」ブームである。この事態そのものが、日本の現代の混乱を象徴しているといえよう。